

みうら じろう
1925年朝鮮京城府（現ソウル市）に生まれる。
1945年京城師範卒業。
終戦で本籍地の北海道に引揚、小学校の教員となり、1985年中標津町立養老牛小中学校長を退職。現在苫小牧市樽前に樽前自然教育研究所を創設主宰。本協会理事。日本野鳥の会理事、北海道自然環境保全審議会委員。

道南日本海側の鳥相が

明らかにされてきた

松山と狩場茂津多両道立自然公園の自然 ③

三浦 二郎

既住の文献がない！

一九八八年度に松山道立公園、翌一九八九年に狩場茂津多道立自然公園の総合調査が、道の委託で実施され、私は鳥類の部を担当した。私は一九八五年教職を退職するまで道東根室管内の勤務が長く、道東地方の鳥相については或る程度の知見の蓄積はあるが、道央以南については勤務の関係で訪問旅行の機会がなく、勿論意図をもってのバーディングの経験もない。唯、終戦の翌年一九四六年の夏、秋季の半年間江差を中心とした道南生活をしたことがあり、多少の土地勘はあった。

さて、現地調査に入るに当って、頼りにするのは既住の文献であるが、いざ該当地域について当てみると、殆どないに等しいのである。この二つの道立自然公園はその大部分が松山管内に属し、狩場茂津多道立公園の北端が後志管内にかかっているのだが、道生活環境部自然保護課が一九八一年に「北海道における鳥類の地域別生息状況（以下「地域別生息状況」と略称）としてまとめたリストは、既住の文献によったものであるが、引用文献数は松山管内では僅かに3点、後志管内は全国（全道）共通の鳥

類繁殖地図調査（環境庁委託財団日本野鳥の会）以外は絶無という状況で、他地域が10〜20点の文献から引用されているのに較べて極端に少ないのである。しかも松山管内の3点も小地域や小旅行の観察で、とても支庁管内全域の鳥類生息状況とは云い難い。その後発表された文献としては、小山政弘が大成高校在勤の3年間のデータをまとめて「久遠地方の鳥」が発表されていたので大いに参考になったが、大成町が海と海食崖という単純な地形であるため、環境の多様性に乏しく、生息種は限定されたりらみがあった。

記録種類数は全道最低！

日本全土で記録された鳥類の種類数は一九七四年登録された「日本鳥類目録」では四九〇種であった。その後確認された種類があるので五五〇種余になっている。この内、北海道で確認されたのは「地域別生息状況」（一九八一）の時点で三四七種であり、これは日本産鳥類の約七〇％に当たるわけである。このバーセンテージは他の都府県に較べて特段に高いものである。これは北海道が広大な面積を有すると

いうことと共に、渡り鳥の通過滞留する重要な位置を占めており、更に野鳥の生息に適した自然環境が豊かに保全されているからである。

しかし、そのリストでは松山管内では九三種が記録されたに過ぎず、最も記録種数の多かった根室管内の二八四種の三分の一にも満たない。これは、つい最近まで日本海沿岸南部の道路整備が遅れ観察研究者の入城が少なく、また定住するバーダーが絶無だったからであろう。「地域別生息状況」が発表された後、前述の通り小山政弘が一九八二〜一九八五年の大成高校在勤中に二九種を記録し、特に海鳥類の記録の空白が補われた。また奥尻島青苗で春の秋の漁期だけ漁業電機商を営む小林輝は業務の合間に島全域をくまなく跋渉し、その知見は豊富であり、特にコウノトリ数羽が飛来したのを観察したと云う。

このように定住するバーダーが少ないことと、相互の情報交換がなかったことが記録種類数が少なかった原因であったのだろう。

因みに、私がこの二つの道立自然公園で実見して記録した種類数は九七種であり、「地域別生息状況」

での松山管内記録種類数を僅かながらでも上回ったことになった。

冷害型気候に悩まされた調査行

先ず調査区域の道路事情を把握するため、調査の初年度の五月中旬に、苫小牧を出発し、森一恵山岬―函館―白神岬―江差―熊石―大城―寿都―岩内と渡島半島の海岸線を三泊四日で一巡した。その時季は夏鳥渡来の盛期なので、鳥相の概要を把握することも期待しての調査行であったが、北東風と冷雨で鳥影少なく成果を挙げることはできなかった。その中で大成町貝取淵の国民宿舎に宿泊した翌朝、林道の奥を調査した時だけ、良好な原生林が保存されていて、曇天ながら豊かな鳥相を記録することができた。この貝取淵林道は、道立自然公園の区域外であったが、この公園の内陸部森林地帯の鳥相を示していると云えよう。特にオオルリは溪谷毎にテリトリーを構成していて、その美声は溪間にこだましていた。オオルリは背面が紺青で、快晴の日は背面が空の青にとけ込んで観察が困難になることがあるものだが、この日の曇天が却って幸いし、しかも若葉が完全に開葉していなかったため、梢の先で囀っている姿がどこでもよく観察できた。オオルリは暖地系の小鳥で道北・道東地方では生息数が少ないもので、松山地方が本州北部の鳥相と共通していることの指標であらうことが推測された。

この後五月下旬奥尻島及び公園南部、六月中旬奥尻島へ再航したが、いずれも晴天に恵まれることが少なく、調査は不調に終始した。また、翌一九八八年の狩場茂津多道立自然公園の調査も、五月中旬は天候が安定せず、本格的に現地調査が実施できたのは六月中旬になってからであった。

奥尻島にはトビとカケスがいない!

奥尻島に初めて渡航したのは五月下旬の二四日、二六日であったが、この三日間も霧と冷雨の芳しくない天候であった。しかし奥尻町市街から勝淵山への横断自動車道の急坂のセンサスで、いきなりアカショウビンの声が沢の方から湧き上がり、オオルリの囀りが頭上のブナの梢から降ってくるといった調子で、数年前の下北半島恐山での探鳥会を思い出させるものだった。

六月一六日に再度渡航、一八―一九日は地質の八木会長(当時)、植物の三木昇と同行して全島を踏査した。この時は天候に恵まれたが、鳥相については早朝の時間だけがデータがとれたもので、日中はエゾハルゼミの斉唱に鳥の声がかき消され満足にデータをとることができなかった。この調査行の中で一七日に青苗市街に小林輝を訪問し、奥尻島の鳥相についての情報の聞き取りをした。この時、氏は全島くまなく跋渉したが、トビとカケスを見かけたことがないと聞かされて驚いた。スズメとカラスは集落さえあればどこに行っても必ずいるものだし、トビはそれについてよく見られる鳥であり、またカケスも集落に森林が接していればかなりポピュラーな野鳥である。私自身三回の渡島でもこの二種についてはついに記録することはなかった。

トビはワシタカ科に属する猛禽の一種であるが、生態的には集落の生ごみや漁村の雑魚等に依拠する清掃鳥であり、性質も温和で攻撃的でない。奥尻島のように漁村地帯であれば、餌は豊富であろうし、本土からは直線距離にしてたかだか二〇kmしかなく、彼等の翼でしてみればひと飛びのことなので、その気になれば往復は簡単であろうし、営巣木となる大

木もあるので繁殖も可能であろう。

カケスについても、この島には彼等が好むブナ・ミズナラ等の実が豊富なのであるから生息の条件は備わっているはずである。「(クナシリ島では)一九六二年にはドングリの実りが少なく、十月降雪前なのに多くの鳥類はクナシリ島から日本列島に渡った。一九六二―六三年の冬にクナシリ島ではカケスがあまり見られず、主として道路上や人家近くにいた。」²⁾というから国後島と日本列島(北海道)との距離は、奥尻島と北海道本土との距離は大差ないのであるから、そういうことでも奥尻島にカケスが生息しない理由を見出すことは難しい。

ともあれ、北海道本土に普遍的なこの二種の鳥が奥尻島に生息しない理由の解明は今度に残された課題である。

ウミネコのコロニーは新しくできたのか?

奥尻島の北東部宮津海岸の断崖部にウミネコのコロニーが形成されており、約六〇〇巢の営巣が推定された。この断崖の上に宮津小学校の南谷校長はこの学校には再度の勤務であり、二年前に赴任した時、前回勤務の時に殆ど見られなかったウミネコが異常に多いのに驚いたということなので、この宮津海岸のコロニー形成はそう古いことでないようだ。

南谷校長は、折角児童等の身近かにできたコロニーなので、教材として活かそうと企て「ウミネコの観察学習」を組織して熱心に指導を始めた。しかし指導がようやく軌道に乗りかけた時点で転勤となり、後任者に継続を託されたようだが、公立学校でのこの種の自然学習は熱心な指導者がいなくなると中断されるケースが多い。宮津小学校のウミネコ学習のその後を知らないし、ウミネココロニーの消息も途

絶えたままになっている。

私はこの宮津海岸のウミネココロニーが新しく形成されたものらしいと聞いて、直感的にオオセグロカモメの圧迫によって移動してきたものでないかと推測したものである。同じようなことは、利尻島や天売島でも見られる現象で、かつて日本海側沿岸にはオオセグロカモメの個体群はそれ程大きいものではなかったのに、近年急速に勢力を拡大しつつある傾向が見られるようになったものである。オオセグロカモメは、同一環境の他種の鳥卵やひなを奪うという習性があるからである。この推測はあくまでも私の独断的なものであるが、組織的に継続的にデータを累積しておく価値はあろうと思う。例えば、天売島のウミガラス個体群（既にコロニーでは云えなくなつた）が絶滅に傾している現在、時既に遅しの感なきにしも非ずだが、長い目で見た海鳥類の保護



写1 奥尻島宮津海岸のウミネコのコロニー

施策のためには必要なことであろう。

イワツバメのトンネル内営巣

北海道では四種のツバメ類の繁殖が確認されており、その内ツバメは市街地・村落の人家に営巣するが道央以南に多く、道東・道北の生息数は少ない。コシアカツバメは各地で稀に記録されたに過ぎない。北海道を主なる繁殖地としているのはイワツバメとシヨウドウツバメであり、シヨウドウツバメは火山灰地や砂泥層の柔らかい地質の切通しや崖地に横に小さな穴（洞）を穿って集団で営巣するので小洞燕の名がある。イワツバメも集団営巣するが、この種類は泥と枯草で椀状または筒状の巣を岩崖に作る。従って岩燕の名がついたが、このツバメは適応性が強いらしく、人家の軒や橋げた・ダムサイト等にも気に入らさえずればどこにでも営巣する。知床横断道路



写2 ウミネコ

の羅臼側の岩溪橋にロックシェルターが完成した直後からイワツバメがコロニーを構成した例がある。

この二つの道立自然公園は、面としてあるのは奥尻島と狩場山・大平山だけで、南は上ノ国町の夷王山から国道を海岸沿いに北上して寿都町の弁慶岬まで指定地が点在する。山地が海に迫っている地形であるため、この国道には多くのトンネルが掘られている。最長のものは茂津多トンネルで一九八三、次いで狩場トンネルであるが、これらの長大トンネルは出口の光が届かないせいかイワツバメに利用されないが、短小トンネルの殆どがイワツバメの営巣に使われ、自動車も頻りに通行しているにも拘らずその合間を縫うようにイワツバメが出入りしている。巣は写真3に見るようにトンネル内に架けられているケーブルを土台にし、その上に泥を重ねて作られている。現在供用されているトンネルばかりでなく、旧国道の古いトンネルも今でも利用しているので、この海岸線のイワツバメはかなり昔からトンネル内コロニーの構成をやっていたものと思われる。

弁慶岬のコヨシキリ

この海岸ではいたる所にイソヒヨドリが観察された。ヒヨドリの名がつけられているがヒヨドリとは類縁が遠くツグミのなまかなのでイソツグミという命名の方が妥当である。その名の通り海岸の岩礁地帯を生息地とするが、稀に山地の岩場にも出現する。そこを定住の地としているのかどうかは分らないが、昭和新年で囀っている雄を観察したことがある。

また海岸でカワセミを観察したことがあるが、これも山が迫っていて川が短かいからと思われる。それに引きかえ、草原的環境に乏しく、草原性の鳥は弁慶岬だけでコヨシキリとノビタキのテリトリが



写3 トンネル内のイワツバメの巣



写4 狩場山々頂の八木前会長と筆者

数多く観察された。

狩場山山頂は雪田と霧だった！

鳥牧村役場に調査のための打合せに行ったところ、担当の係員がよい顔をしないので変だなと思っていると、ヒグマの出没があるので単独での入山は控えてほしいと云うのである。鳥類センサスは私一人ではできないので、実際には単独入山し、ヒグマとの接近も実際にはあつたが事なきを得たこともある。狩場山山塊は狩場茂津多道立自然公園の中で大平山西側斜面と共に面としての指定区域で、しかも面積的には最も広い。しかし、登山道をたどるしか調査の方法がなく三本の登山道のうち最もポピュラーな賀老高原口からの登行を試みることにした。山麓から望む山頂部にはまだかなりの残雪があるようだが、鳥類調査としては七月も中旬に入り時季的には限界である。

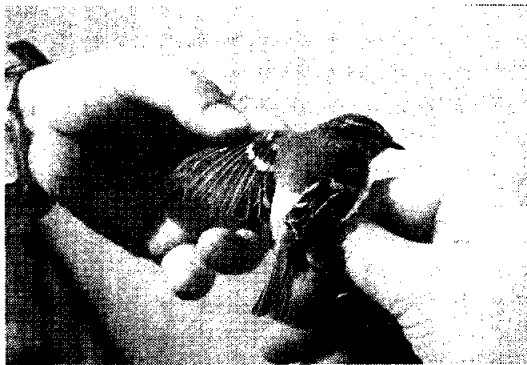
同行は八木会長（当時）ともう一人の若者であったが、八木会長は夕張岳に二日続けての登山の直後というのに、かくしゃくたる足どりで登行されたのには驚嘆させられた。登山道はブナ帯とダケカンバ帯が交互に織りなし、それぞれに鳥相に違いがあつて興味深いものがあつた。やがてミヤマハンノキ帯になり、東狩場山の腹を巻いて稜線にとりついたが、その年の冷害型の天候のため、一面の雪田であつて、高山植物の群落の殆どは雪の下にまだ眠っていた。所々にシヨウジョウバカマと何種類かの花がほころんでいたが、一斉の開花にはまだ一週間を要するであらうという風情であつた。それに峰越えの霧が去来し、その霧の中からノゴマの囀りがしきりであつたが、晴天であればもっと多くの個体数が確認されたであらうし、カヤクグリ等の高山鳥も出現したと

思われる。

頂上でつかの間の間の霧の晴れ間に昼食休憩をとり、下山では膝を痛めた八木会長等より一足先行して、ヒグマよけの大声を発して露払いしたものである。

バンディング調査で大きな成果が！

二つの道立自然公園の調査では、秋の渡りの実態把握を目的として、奥尻島と賀老高原とで十月中旬にバンディング（鳥類標識調査）を実施した。十月中旬というのは北海道の秋の渡りの最盛期ではあるが、道南地方では一週間程ピークがずれる傾向が認められた。賀老高原での調査では、メジロの小群に混つてカラフトムシクイという大陸系の珍鳥が捕獲され、我が国初の標識放鳥をするということがあつたが、高原地帯は渡りの主要コースからはずれてい



写5 カラフトムシクイ

後の渡りコースの解明に参考となることでもあった。
この調査を通じて、珍鳥カラフトムシクイよりも何よりも、数人の優秀なバンダーが育ち道南チームとして大きな実績を挙げつゝあることである。特に厚沢部町館小学校勤務の林吉彦は、バンディング及びバーディングによって松山管内の鳥類リスト充実に貢献している。因みに一九九一年現在で松山支庁管内での記録種類数は二二二種^{註3}で全道平均に並ぶようになっている。

註1 小山政弘…一九八五 久遠地方の鳥、北海道野鳥だより 第六一号

註2 V・A・ネチエフ、藤巻裕蔵訳…クナシリ島の鳥類の生活における木本植物の種子と果実の意義、サハリンと千島列島の生物資源一九七〇

註3 日本野鳥の会北海道ブロック支部連絡協議会…一九九一北海道地域別鳥類リスト